

保育科の皆さん、専攻科の皆さん、卒業ならびに修了、おめでとうございます。

さて唐突ではありますが、ここにいる皆さんのうちの誰が、この大学に入学したとき、卒業式をこのようにマスクを着用して迎えることを予想することができたでしょうか。この不安で不便な生活は、かれこれ一年ほど続いています、おそらくこのような状態は、当分は続いていくように思われます。

しかし、このような生活が続く中で、わたしたちが、この新型コロナウイルスから学んだこともあります。「これまで当たり前であるとふつうに考えられていたことが、じつはそうではないのだ」ということも、そのひとつかもしれません。

たとえば、今回の卒業式。例年と同じように行われると思われていた卒業式も、今回は、三密を避け、ソーシャルディスタンスを保ちながら、できるだけ時間を短縮し、飛沫を避けるために唱えるところも極力少なくし、皆さんがよく知っている歌も歌わず、大好きな主の平和の握手も避けながら、行うことにしました。また恒例の茶話会・卒業パーティ。これも、これまでは行うのが当然、当たり前だとされてきたことです。

もともと、わたしの記憶では、柳城で卒業パーティを中止したことは4回ありました。それは、1995年、2011年、2020年、2021年です。1995年は阪神淡路大震災のため、2011年は東日本大震災のため、2020年と2021年は、言うまでもなく新型コロナウイルスのためでした。

二つの震災のときは、多くのいのちを失った方や被災された方のことを覚えながら、そのような決断をしました。昨年と今年は、いのちをなくした人びとのことを覚えながらも、わたしたち自身の健康と安全、いのちを守るためにそのような決断をしました。

考えてみますと、いずれの場合にも、そこにはいのちの問題が深く横たわっていました。そしてまた、震災のときもそうでしたが、それまで当たり前、ふつうだとされていたことが崩れていく度ごとに、わたしたちは行事を見直して、立ち止まったようにも思います。

わたしたちは、仲間と共に食べ、共に笑い、共にしゃべることが、どれほど楽しくどれほど喜ばしいことであるかを、よくわかっています。

いっしょに歌って、いっしょに食事をして、ある意味で、満たされた気分で皆さんを送り出すことができればどれほどよかったかと柳城の全教職員が感じています。

ただ、いまはそのことができません。これは否定できない現実であります。

しかしながら、いまはできないことがやがてできるようになること、「いまはできないけれどもやがてできるようになる」という思いを心に抱きながら歩む力が、人間には与えられていることも確かです。キリスト教では、そのような力を「希望」と呼んでいます。

いまという時代は、日本だけでなく、世界中が、まさしく希望を抱く時だと思えます。

そして、このいまという時代に、いまの皆さん自身を重ね合わせていただくのに相応しい時、それがこの卒業式でもあります。

保育者として巣立っていく皆さんも、いろいろと大学で学んだけれども、できないことがたくさんある。それでも下も見てうなだれるのではなく、やがてできるようになるという希望をもって歩み始める、その出発のとき。

皆さんが現場で出会う小さな子どもたちもそうです。いまはまだできないことがたくさんあるけれども、成長するにしたがって、いろいろとできるようになる将来に向かって歩む姿は希望の姿そのものであります。

保護者も同様です。親としてできていないことはたくさんあるけれども、子どもを育てる自分たちも子どもたちから力づけられながら、希望を抱いて歩んでいるのです。

英語で卒業、学位授与式を示す言葉に **commencement** という言葉がありますが、このもともとは「始まり」という意味です。

卒業式は「終わり」の式ではなく、「はじまり」の式であり、スタートをするときであります。

20年以上も前の柳城の卒業生が先日大学を訪れてきて、今も、同期の9割と連絡がとれていて、しかもほとんどが保育の仕事をしていることを聞き、とても嬉しくなりました。

それはもちろん短大時代の2年間の出会いの密度も高かったのでしょうか、よく聞いてみると、卒業してから、お互いが保育者としていろいろと経験するにつれ、本格的な出会いがはじまって今に至っているというほうが実情に近いようでした。

これまでのお互いの出会いに感謝しながら、これから皆さんの出会いがますます深まることを心より願っています。そしてその出会いの場所のひとつのこのキャンパスがあることを忘れないでいただきたいと思います。

最後にもう一度、希望を抱きながら、新たにスタートするこの卒業式を迎えられた皆さん、心よりおめでとうございます。